



クラブと市が連携して地域交流を応援。 きめ細かいタウンミーティング



自治会町内会ごとに参加者を募る地域交流応援シート。スタジアム初観戦の参加者も多い ©清水エスパルス

地域の連帯再生にも一役

オレンジ色ののぼり旗に先導され、子供からお年寄りまで、幅広い年代の団体がバスを降り、スタジアムへ続く坂道を歩いていく。清水エスパルスのホーム、アウトソーシングスタジアム日本平の見慣れた光景だ。清水エスパルスと静岡市が連携し、2007シーズンから始めた「地域交流応援シート」事業。市内の各自治会連合会単位で観戦チケット購入者を募り、貸し切りバスで送迎、専用シートでスタジアムの興奮と感動を共有してもらおう。参加者はボランティア「パルちゃんクラブ」のスタッフによって案内され、応援方法などのレクチャーも受ける。3年目の今季は、8月末時点ですでに昨季の年間参加者の8,000人を超えた。沼津市や富士市、牧之原市など周辺市町にも広がり、今季は2万人の目標達成に向けて事業を推進中だ。

参加を通じ、初めてスタジアムで観戦したという人も少なくない。「子供が大喜びだった」という主婦、「サッカーを始めるきっかけになった」という小学生、「年がいても興奮した」というお年寄り。参加者からのアンケート回答には、初体験の興奮と喜びの声があふれる。「これをきっかけにクラブを身近に感じ、リピーターとなって足を運んでくれる人も多んですよ」とエスパルスホームタウン推進室の深沢陽介室長。日ごろ疎遠になりがちなお年寄り同士が顔を合わ



深沢陽介ホームタウン推進室長(清水エスパルス)

せ、歓談する場でもあり、地域の連帯の再生にも一役買っている。景気悪化の影響もどこ吹く風、昨季リーグ戦ホームゲームのスタジアム収容率は82.1%に達し、J1、J2を通じてトップに立った。入場者数も右肩上がりの伸びを見せ、今季も昨季のリーグ戦1試合平均1万6599人を上回る1万8157人で推移している(8月末現在)。

こうした活況を生み出した原点は、クラブと静岡市が2005年度に展開したタウンミーティング「橙(オレンジ)色の夢」だ。

旧清水市と旧静岡市が2003年に合併し、新「静岡市」となる以前から、旧清水市は「サッカーフレンドシティー構想」を掲げてエスパルスとの連携による地域活性化策を推進していた。しかし、旧静岡市にはエスパルスを「あくまで隣市のホームクラブ」と見る意識が根強く、合併してからもその温度差は残っていた。そこで、新「静岡市」全体でエスパルスをホームクラブととらえ、一体となって応援してもらおうという狙いのもと、市とクラブが協力してタウンミーティングの実施に踏み切ることになったのだ。

市民の生の声に耳を傾ける

訪問はきめ細かった。静岡市の葵、駿河、清水の各区を77町内会自治会単位で一つ一つ回っていった。公民館や小学校の体育館の会場にエスパルスの早川巖代表取締役社長と当時の静岡市サッカーのまち推進室の綾部美知枝室長が訪ね、早川社長はクラブの現状と展望、綾部室長は静岡市とクラブのかかわりや地域への貢献の大きさについて、繰り返し熱心に説いた。多いときは週3回のペースでタウンミーティングを開催し、1年間で実に69カ所を回りきった。参加者との質疑応答が熱を帯び、午後7時からの会合が9時を回ることもたびたびあった。タウンミーティングに深く携わってきた静岡市の池田好正ホームタウン推進室長は「各自治会町内会長さんと顔のつながりができて、その後の



池田好正ホームタウン推進室長(静岡市)



タウンミーティングでクラブの現状や展望などを熱心に説き、支援を呼びかける早川代表取締役社長 ©清水エスパルス

事業展開の契機になった」と成果を強調する。

タウンミーティングで出された質問や意見、アンケートの回答は、チームの戦力のことだけにとどまらなかった。スタジアムへの交通アクセスの改善や大型ビジョン設置の要請、トイレなどスタジアムの施設改修に関することまで多岐にわたった。市民による生の声に耳を傾ける貴重な機会となり、この礎が「地域交流応援シート」事業のバス送迎による交通アクセスの利便化、大型ビジョン設置の実現などの後押しにつながった。

クラブと地域の交流の輪は広がっていく。エスパルスのロゴ入りの「オレンジバンド」を身に付け、市内の飲食店などの加盟店に行く割引などの特典が受けられるキャンペーンもその一例。商店街へのポスター掲示活動などに汗を流し、クラブと地域との間を取り持つボランティア「オレンジ化推進委員」の陰の働きも活発だ。各地域からは、お祭りなどの催しに選手やオフィシャルチアリーダー・オレンジウェーブ&ダンススクール生の参加を求める声も以前にも増して挙がるようになったという。

率先して地域交流のイベントに参加している兵働昭弘主将は「選手を身近に感じてもらって、1人でも多くスタジアムに来てもらえたらうれしい。子供たちも喜んでくれるし、僕たちにとってもプレーの励みにもなる」と意義を強調する。さらなる地域浸透を見据える深沢室長は「まだスタジアムに来たことのない市民も多く、さらにホームタウン活動を活性化させていく必要がある。親子の日常会話にエスパルスの話題が出て、もっともっと笑顔が広がっていけば」と意欲を口にしました。

(静岡新聞社 宮嶋 尚顕)

スポーツを通じて豊かな社会の創造を目指す「Jリーグ百年構想」の実現に向けて、JリーグとJクラブはさまざまな施策を展開している。その活動の最前線ともいえるJクラブは、それぞれのホームタウンを中心に、地域の特色、実情などに応じて多彩なプログラムに取り組んでいる。地域に根差し、活力を与え、人々の交流と触れ合いを促進する、こうした活動を紹介するシリーズの17回目は、清水エスパルスと栃木SCにスポットを当てた。



スポーツで、もっと、幸せな国へ。
J LEAGUE 百年構想

34 栃木SC



地域との関係を強化する土台づくり。 県内サッカー界の将来も見据えて

「スマイルクラブ」の活動

2009年3月8日、栃木県のサッカー史に新たな1ページが刻まれた。

今季からJ2に入会した栃木SCの開幕戦。ホームスタジアムの栃木県グリーンスタジアムには、開場前から1,000人近いファン・サポーターが列をなし、開門を待ち構えた。

ぎっしりと埋まった客席はチームカラーの黄色に染まった。キックオフ直前、タオルマフラーを両手で広げたファン・サポーターが「県民の歌」を誇らしげに歌い上げる。スタジアム全体が温かい雰囲気に包まれた。200万人県民が待ちに待った瞬間だった。

「ようやく栃木にJクラブが誕生した。これからは本当のスタートになる」。その瞬間を、ピッチサイドで迎えた上野優作地域活性化グループテクニカルディレクター(TD)は感慨深そうに振り返った。

上野TDは栃木県真岡市出身。筑波大からアビスパ福岡へ加入し、サンフレッチェ広島、アルビレックス新潟などで選手として活躍後、2007年6月、当時はJFLの栃木SCに移籍した。「キング・オブ・栃木」の愛称で親しまれ、抜群の存在感を發揮。惜しまれながらも昨季限りで現役引退した。現在はクラブの顔として、チームを裏方で支える一人だ。

所属する「地域活性化グループ」はその名のとおりに、いわばクラブと地域との窓口。「地域に根差したクラブ」を目指す栃木SCにとって、その成功の鍵を握る心臓部だ。J2に入会した今季は、グループ内の活動を「スマイルクラブ」として統一。老若男女、県内すべての人をターゲットに活動している。

スマイルクラブのコンセプトは「ENJOY・TOUCH・TRY(楽しむ・ふれ合う・やってみる)」。主な活動は「サッカースクール」「サッカー教室」「スマイルキャラバン」「アクティブシニア」「スマイルトーク」「夢プロジェクト」だ。

「夢プロジェクト」は県内の小中学校を選手、スタッフが訪問し、夢を実現させた選手が



上野 テクニカルディレクター



スマイルクラブの活動の一つ、夢プロジェクト。選手たちが県内の小中学校を訪問し、夢を持つことの大切さなどを語る © 栃木SC



未就学児を対象に今年からスタートしたキッズキャラバンは大人気。園庭には子供たちの歓声が響く © 栃木SC

自らの体験をもとに、夢を持つ大切さやフェアプレー精神の重要性などを講話や実技を通じて子供たちに伝えている。昨季から行っている人気プログラムで、これまでに約30校、3,000人の児童を対象に実施した。上野TDはファン層拡大の効果はもちろん「子供たちとふれ合うことで、選手自身も得るものが大きい」という。

今、一番人気を集めているのが「スマイルキャラバン」だ。未就学児を対象に今年からスタートした。スタッフが県内の幼稚園、保育園を訪問し、サッカーを通して体を動かすことの楽しさを知ってもらうのが狙いだ。「子供たちの笑顔を引き出せるのがスポーツの良さ。子供たちの笑い声、元気な姿を見られるのが一番」(上野TD)。園庭に響く子供たちの歓声を聞くたびに、クラブの方向性が間違っていないことが実感できる活動の一つだという。

一方で、宇都宮市と連携し、シニアを対象とした介護予防事業「アクティブシニア」にも力を入れている。「スマイルトーク」では栃木SCのスタッフが学校や各種団体などで講演。上野TDは出身校でもある真岡高校に出向き、後輩たちに熱いメッセージを伝えた。

「今年からスマイルキャラバンなどの取り組みをスタートできたのは大きな第一歩」と話す上野TDだが、「まだ活動を模索している段階。クラブとしての独自性が發揮できていない」と反省も忘れない。

サッカーを楽しめる環境を

栃木SCがスマイルクラブの活動に力を入れて

いるのには大きな理由がある。経営基盤の強化だ。Jリーグ入会に際して、Jリーグ側からは再三、経営面の脆弱さを指摘された。J2入会を決めた今季は、年間予算を前年の約1.5倍となる約6億円に増やした。母体となる大企業を持たないクラブにとって、ファン層の拡大は健全経営のための絶対条件。しかし、チーム成績も影響し、今季のホームゲーム入場者数は伸び悩んでいる。それだけに、地域との関係をもっと強化するための土台づくりをしたい、という。

順調そうにも見える活動だが、課題も浮き彫りになってきている。足かせにもなっているのが県内でサッカーを楽しめる環境の少なさだ。「可能な限り活動したいと思っても、活動できる場所が限られている」(上野TD)。そこで視野に入れるのが他の先進クラブが取り組む校庭の芝生化だ。「もっとサッカーを楽しめる環境を整えたい。校庭が芝生だったら最高でしょう」。夢は大きく膨らむ。

栃木SCがどれだけ地域に根差した活動ができるかは、クラブだけでなく県内サッカー界の将来をも左右する。「人間関係が希薄になっている今だからこそ、サッカーが人と人との新たなつながりを生み出し、サッカーを通じた街づくりをできるのが理想。自分たちはピカピカの1年生。今取り組んでいる活動の一つ一つを、これから大きく育てていきたい」。上野TDは力を込める。

百年後の明るい未来を見据え、栃木SCの活動は緒に就いたばかりだ。

(下野新聞社 高山 知昭)

ピッチ内外で貴重な国際交流



U-14 オランダキャンプ



U-15 ブラジルキャンプ



(上) エクセルシオール・ロッテルダムとのトレーニングマッチを前に、相手チームの選手と記念撮影

(中) 素晴らしい環境の中でトレーニング。「緑が多くて、とても過ごしやすい」という感想もあった

(下) 予選リーグ第2戦、ハンブルガーSV戦のキックオフを前に



(上) トレーニングマッチを行ったカラングラの選手たちと記念撮影を行ったU-15 Jリーグ選抜

(中) 日伯友好カップへの参加も恒例。最初は緊張していた選手たちも、試合ごとに本領を発揮した(フラメンコ戦)

(下) ブラジル到着初日、開校式に臨んだ選手たち

JリーグはU-13 Jリーグ選抜を韓国(JOMO CUP 2009、前号既報)に、U-14 Jリーグ選抜をオランダに、U-15 Jリーグ選抜をブラジルにそれぞれ派遣し、海外キャンプを実施した。海外キャンプは2005年に始まり、Jクラブのアカデミーに所属する育成年代の選手に、国際試合の経験を通じて競技力向上を図るだけでなく、海外文化に触れ、現地の人々との交流によって豊かな人間性をはぐくむことを目的としている。

8月24日～9月1日の期間に行ったオランダキャンプでは、第16回国際ユース大会 Audax Willem II (ヴィレムII) に参加。アーセナル(イングランド)、ハンブルガーSV(ドイツ)、フェイエノールト(オランダ)というビッグクラブを相手に3戦全勝で予選リーグを1位通過。準決勝ではチェルシー(イングランド)に0-1と惜敗したものの、3位決定戦でPSVアイントホーフェン(オランダ)に2-0と快勝した。また、大会MVPにFW北川柊斗(名古屋グランパス)が選出された。

8月24日～9月2日に行われたブラジルキャ

ンプでは、恒例となった第12回日伯友好カップに出場。予選リーグでフラメンコ、CFZ、ヴィトリアと対戦し、健闘はしたものの3敗の成績だったが、大会のフェアプレー賞を受賞した。

また、チームには初めて海外に出る選手もあり、「時差がかなりあって不思議だった」(U-15)という素朴な発見もあったが、オランダ、ブラジルとも対戦相手の選手たちとの積極的な交流は、「もっと英語などを覚えたほうがいいと思った」(U-14)など、大いに刺激となったようだ。さらに、主催クラブの充実したホスピタリティに接し、クラブメンバーが大会のボランティアを務めたオランダでは、スポーツクラブのライフスタイルに触れる貴重な機会を得た。

プレーの面では、両キャンプとも「当たりが強く、ゴールに向かうスピードがとても速かった」(U-14)、「体力とゴールへの意識が高い」(U-15)といった感想が多かった。だが、試合をこなすごとに相手のプレーに対応できるようになり、「自分たちのプレーをすれば勝てる」(U-14)、「技術面では負けていない」(U-15)と自信を深めていった。

ブラジルキャンプに団長として参加した

Jリーグ技術委員会委員長 上野山 信行

ジーコが創設した日伯友好カップは、ブラジル国内でも高い注目を集めており、多くのスカウトも集まるハイレベルな大会である。その中で選手たちは、「ブラジル」という強いイメージに圧倒されたのか、初戦は何もできなかったが、2戦目、3戦目は徐々に本来の力を発揮することができた。残念ながら大会で勝利することはできなかったが、選手自身がそれぞれ力不足を痛感し、次のステップアップにつながる課題を見つけたことが大きな収穫だった。

オランダキャンプを視察した

JリーグHR開発プロジェクトグループ マネージャー 中西 大介

欧州ではこのようなクラブ単位の国際ユース大会が数多く開催されていて、うらやましい限り。日本は地理的なハンディを克服するためにも、このような大会に積極的に参加する必要性を再認識した。選手たちもビッグクラブに臆することなくよく戦った。単なるいい経験以上のものが得られたと思う。日本チームのグッドイメージも植え付けることができたと思う。一方で、大会のホスピタリティも素晴らしいかった。

●Jリーグ選抜 海外キャンプサプライヤー

ミスノ株式会社：ユニフォームおよび移動着などを提供
株式会社モルテン：ボール、作戦盤などの備品を提供
日本コカ・コーラ株式会社：スクイズボトル、クーラーボックスなどの備品を提供



「Jリーグニュース」は100%再生紙を使用しています。